2007年度第1回大学教職員のためのFDセミナー参加報告

基礎教育センター・准教授
北澤　武

2007年5月26日、第1回大学教職員のためのFDセミナー（大学セミナーハウス・学習学協会・法政大学FD推進センター主催）が、法政大学市ヶ谷キャンパスで行われた。本セミナー開催の背景として、eラーニングが急速に普及している今日において、対面授業の講義・演習のあり方を再検討しなければならないことが挙げられた。

対面授業に求められているのは、知識の伝達から、学生一人ひとりの能力を向上させる教育へのシフトであり、基礎力、学習スタイル、学習速度を異にする多様な学生への対応である。大学教員には、講義内容を興味深く伝えるプレゼンテーション能力、参加型授業に学生を誘うファシリテーション能力、個々の学習意欲を高めるためのコーチング能力などが不可欠になっている。そこで、大学でインタラクティブな講義・演習を実施する手法について、講師から報告された内容を以下に記す。

FDの新しい方向性：eラーニングに淘汰されないために

講師　本間正人（NPO学習学協会代表理事）

1. はじめに

長年、大学教育では、学習者に新たな知識を獲得させる手法として、指導者は講義形式で知識を伝達し、学習者は知識を受け身で獲得する方法が行われてきた。知識を詰め込むだけの学習に慣れた学習者は、教わることに慣れてしまい、正解を見つけることだけに力を注ぐようになるという。そもそも、学習とは「外界を認知し、自らの特質を生かす形で、環境に自らを適応させること」と定義されることから、受け身な学習で、正解だけを求める学習は、本来の学習と異なると考えられる。そこで、指導者は、学習者が主体的に学びを行いながら、知識獲得できる教授法を行うことが求められる。

本セミナーでは、はじめに、学習者の主体的な学びと学習を意味する「学習学」という考え方を紹介し、その後、インタラクティブな技法の解説を行った。

2.「学習学」の考え方

学習学の前提として、1）人間は一生、学び続ける存在である、2）人間の五感、心は学ぶ機能を果たしている、3）人間には学ぶ力が備わっており、それを引き出すことが指導者の役割、4）あらゆる学びに共通する効果的な学び方のコツが存在する、5）言語コミュニケーションによる「学びあい」が人類最大の強みの5項目を挙げている。そして、教育と学習の差異について、教育とは個人の外側から内側へのはたらきかけであるのに対し、学習とは個人の内側から外側へのはたらきかけであると述べられた。学習学とは、上記にある学習学の前提を認知しながら、個人の内側から外側へはたらきかける（学習）ことによって、個々に秘めた内なる可能性（玄徳）を外界に開花させる（明徳）ことであると主張された。

学習学の具体的な内容として、以下の手法を記述する。

●指導者

- ➢ Facilitating (Facilitator)
  集合研修の中で学習者の学びを促進する
- ➢ Coaching (Coach)
  1対1の個別指導
- ➢ Mentoring (Mentor)
  自らが経験して学んだ体験を踏まえて伝える

●学習者

- ➢ Learning (Learner)
  自ら主体的に学ぶ

上述の手法ができているか否かを評価していくことがFD活動として必須である。

3. コミュニケーションの機能

大学教員が学生に上述の手法で指導を行うためには、学生との信頼関係を築かなければならない。コミュニケーションを円滑にするために、コミュニケーションの機能について以下の3つを挙げられた。

（1）理解を増やす

人は他者に対して、固定概念、先入観、思い込み、決めつけ、偏見などのイメージを持つ。そこで、実際に相手の立場に立って、相手を理解したり、相手の良さに気付いたりする必要性が求められる。

（2）人間関係に影響を与えるもの

コミュニケーションにはフェイス・トゥ・フェイス（F2F）が基本である。先行研究によると、F2Fで相手の感情に与える影響は「言語（7%）」、「音声（38%）」、「身体（55%）」と指摘されている。つまり、同じことを

伝えるのに、言い回しを変えるよりも、音声を変えたり、ボディーラングエッジしたりするほうが、相手の感情に与える影響は大きいという。授業に対する学生の満足度が低い原因の一つとして、教員のテンションの低さなどが考えられよう。この場合、音声、身体が相手の感情に与える影響が大きいことを教員が授業中に意識するだけで、学生のやる気が変わるかもしれない。

(3) 衆知を集める

良い授業実践やコミュニケーションを高める手法を知ることで、学生とのコミュニケーションを図るレパートリーが増えるだろう。そこで、今後、FDセミナーなどを通じて、より良い実践を知る機会を多く増やすことが求められる。

4. ブレーン・ストーミング

ブレーン・ストーミングとは、ある一つのテーマ（具体的な解決手段が求められる内容等）について、複数人で議論しながら数多くのアイデアを出すことである。これによって、相手の考えを理解する機会が増え、かつ、自分の考えを相手に伝える機会が増えることが予見される。そのため、ブレーン・ストーミングは学習学の観点から有効な教授法の一つである。

ブレーン・ストーミングで出された意見に対しては、どんな意見に対しても否定しないことを参加者に指示することが重要である。また、特定の人物が記録を行うと、記録者は発言する機会を失いがちになるため、参加者全員が記録する環境を整えることが求められる。

5. アイスブレーキングの理論＆方法

人が自ら学習活動するよう支援する方法として、1）緊張をとかす、2）自己開示させる、3)「らしさ」を出させるなどが挙げられた。1）の方法として、例えば、体を動かしたり、息抜きさせたりする手法の紹介があった。2）の方法として、例えば、自分がインタビュアーになったつもりで相手のうれしかったこと、成功した体験などを訪ねる方法が述べられた。3）の方法として、例えば、自分は動物にたとえると何か述べてもらい、その理由が何であるか、後ほどグループ内で議論する方法が紹介された。

6. おわりに

以上、研修で報告された内容について記述してきたが、これらを実践するためには、教員の個性、講義内容、教室環境に影響を受けると思われる。また、実践とその成果が表れるまで、多くの時間を費やすと思われる。1週間は7日と考えると「予定が詰まっていて、こんな実践できない」と思ってしまうだろう。だが、「1週間は168時間」と考えると、168時間のうち90分（1講義分）ならば実践してみようという気持ちになるのではないか、というアドバイスがあり、共感できるところがあった。

今後、自己の授業を振り返ることが、FD活動の第一歩であることを認識しながら、それを継続的に実施することが必須であることを学んだ。

参考図書

本間正人（2002)「英語で鍛えるロジカルシンキング」、日経BP社
本間正人（2003)「人を育てる叱りの技術」、ダイヤモンド社
本間正人（2004)「できる人は1週間を168時間で考えている」、中経出版